

五十嵐 均

HITOSHI-IGARASHI

2010年の殺人



五十嵐 均

2010年の殺人

角川書店

2010 年の殺人



五十嵐 均

1995年10月27日 初版発行

発行者／角川歴彦

発行所／株式会社角川書店

東京都千代田区富士見2-13-3 〒102 振替 00130-9-195208

TEL 営業03-3817-8521 編集03-3817-8461

印刷所／旭印刷株式会社

製本所／株式会社鈴木製本所

落丁・乱丁本はご面倒でも小社角川ブック・サービス宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。

©Printed in Japan ISBN4-04-872891-1 C0093

2010年の殺人

この著を脳の泰斗 畏友大木幸介博士に捧げます

目次

第一章 遺伝子の舟 5

第二章 記憶転写 57

第三章 未知への旅 113

第四章 二人の自分 164

第五章 プランテーション 217

エピローグ 263

あとがき——ドグマなしの人間論——

装幀・毛利
彰

第一章 遺伝子の舟

一 ネガティブ・レジスター

「ご覧よ、あの建物を。後光が射している……」

千代田区永田町二丁目の国民党本部の最上階、九階にある幹事長執務室の窓越しに、錦木正義は朝日を浴びている石造りの首相官邸を指さした。

「本当に厳しい感じ、まるで現代の神殿ですわ」

立花菜保子は旅行仕度のジョルジオ・アルマーニのスーツですっきり身繕いしている。伸びやかな上半身を陽が当たっている窓に向けて、感心したように頷いた。

「首相官邸って、考えようでは日本の神殿かもしれませんわね」

エキゾチックな感じの高い鼻と、切れ長な眼の間に、ちよつと皮肉な微笑を浮かべた。

「先生は何の神になるんでしょう、あそこへ入るときは。大神のゼウスか、シバの魔神か……」

「いや、ぼくはそんなおどろおどろしい神にはならない。愛に満ち溢れた、現代の福の神かな」

「どうですかねえ……」

菜保子は政界の関係者や選挙民など、ひと目があるときは錦木のことを『先生』と呼ぶ。ふだんは

『あなた』だが、甘えているときや閨房けいぼうの中では『正義まさよしさん』と呼んだり、時に応じて幾通りにも変化するのだ。

すぐに朝の太陽は、築後数年しか経っていない宏壯こうそうな首相官邸の陰に入つて、国民党幹事長室はクーラーが効いた冷んやりした空気に包まれた。

「ブラジルは治安が格別いいとは言えない。気をつけて行つて来てくれよ」

錦木は菜保子の旅姿を、羽根付きのビロードのハットから高いヒールつまさきの爪先まで、いつ刻ときじつと眺めて、満足げに頷いた。

ブラジル移民の子である錦木正義は、ブラジルの、それもとくに、これから菜保子が赴くアマゾン流域に特別の思い入れがある。彼が四十九歳になつたいま、農園を営んでいた両親は亡くなつてゐるが、あちらには二人の兄妹が暮している。難産のためにすんで死ぬところだったという次男の彼は、父親の決断で、生まれなかつたものと思つて高校入学時、単身日本へ送られた。しかしそれまでは、多感な少年時代を大河とジャングルのプランテーションで過したのだ。

三十六歳の菜保子のほうは、まだ失われていない若さにしつとりした中年の魅力が加わりかけていて、政治家錦木の代理としてはるばるブラジルまで出かけて行くのに十分な貫禄のようなものが漂っている。

「日本向けの作物を作つていたブラジルの農園は、いま苦境にある。知つてのとおりわが国ではバイオの食料工場がどんどん増加して、味や品質で、露地ものに勝てないと言われていた二十世紀の常識を破つてしまった。自分の眼でじっくり向こうの状況を見て、いま日本政府ができるいちばんいい援助の方法を、きみなりに掴つかんで来てくれることだ」

「はい、わかっていますわ。任せてください」

「飛行機は何時だったかね」

「十一時ですね。H S S Tでロスへ飛んで乗り継ぐことも考えましたが、接続が悪いので東京からノンストップのリオ行きにしました。亜音速機ですから飛んでる時間は長いけど、途中降りないからかえって早く着きます。リオからは国内線の飛行機でマナウスへ行きます」

「そうか、飛行機の中でよく寝ておくといひよ」

昨夜、菜保子が錦木の赤坂の邸に泊まり込んでしまつて、ベッドで彼を寝かせなかったことを言っているのだ。

「ええ、リオまで十四時間ですから、そのあいだに眠りさえすれば時差ボケもありませんわ」

錦木の使いで何度もアマゾンを往復している菜保子は、旅慣れた口調だ。

「往復が一日半、向こうに七十二時間いるとして、来週の半ばには戻ってまいりますわ」

「ああ、ご苦労だね。帰つて来たら週末は、熱海の家できみとゆつくりしよう」

錦木は優しく言つて、

「では、行きなさい」

彼女を促した。

二〇一〇年三月二十六日の金曜日は、午前九時半からほぼ十五分おきに、昼まで十人もの客とアポイントメントが詰まっているのだ。

「あなた、行つて来ます」

菜保子はゆつたりした革のソファから立ちあがつて、向かいあつていた錦木に歩み寄り、真横から彼を抱擁した。錦木はそんな彼女に軽く唇をあわせたが、自分もそれでは物足りなくなつたようだ。百七十四センチある体形をいまでも七十キロ以内に食い止めている錦木は、精悍とさえ言える身のこな

しで、しっとり肉が付いている菜保子の身体を抱き取った。

「愛しているよ。きみが旅行しているあいだも、夜遊びはしないからね」

「したら、殺しますわ」

彼女が知らない若い頃は、いまよりもっとハンサムだったらしい錦木の顔に、熱いキスを浴びせつづけた。

クロコダイルのバッグと小振りなサムソナイトを両腕に提げた菜保子が、櫛の扉を開けて出て行く、入れ替わりに第二秘書の泊哲也が入って来た。がっしりした長身である。

「J R 東海の大崎社長がお見えで、お待ちになっています」

政治家錦木の尻を叩いてスケジュールをこなさせるのが仕事と思っている泊は、職業的なテキパキした口調で、今朝の彼の最初の来客を伝えた。

「お通ししなさい」

連立与党の一つである国民党は、衆議院の議席が四十五名と、三番目の与党なので、四名の閣僚を出しているが、ナンバー2である錦木自身は入閣していない。過半数を有する党が単独政権を担う政治状況は二十年前に終わってしまった。国民の意識の多様化とともに、いまでは政党の数も多い。イデオロギーの時代が去った今、政治家は政策で勝負するしかないと思っている錦木は、現在の連立政権の中にあつてつぎつぎと新しい施策を打ち出していた。今次国会で成立した『大深度土地公有化法』もその一つで、J R 東海の社長はそのお礼にやつて来たのだ。

「先生、このたびは何と感謝申し上げますよ、よろしいか」

幹事長室へ入ってくるなり、大崎社長はその歳ではこれ以上深くは屈めないくらい腰を折って、錦木の前で最敬礼した。

「大深度法を成立させていただいたお陰で、行き詰まっておりますりニア新幹線の開通見込みも、ようやく立つことになりました。これはすべて、錦木先生のお力だと思っております」

綺麗な銀髪に桜色の頬をした、いかにも大企業社長という風貌の大崎は、いくら感謝してもしきれないという表情だ。

二十一世紀に入って、経済政策からはイデオロギー対立が解消してしまった。選挙を勝ち抜くためには、指導者の人氣が半分と、あとは掲げる政策の具体性や新鮮さで勝負が決まる。創造力があり政策通の錦木が切りまわしている国民党は、このところ得点を稼いでいると言っているだろう。

「社長おん自らお越しいただいたとは恐縮ですな。まあ、お座りください」

錦木は余裕の表情で、彼を今まで菜保子と抱きあっていた窓際のソファへ座らせた。

「大崎社長もご承知のようにこの法律は、前世紀の80年代からたびたび論議されていたんですが、私権の制限に関わるのでなかなか難しくね。やっと成立したことで、大規模開発が一挙に促進されるでしょうな」

錦木が言うごとく、私有地の地表から二十メートル以下の地下を公有と決めて、ここに工作物を構築する場合、建設法規上の認可さえ得れば上部の土地所有者の承諾を要しないという画期的なものであった。この法案の成立で真っ先に受益者になるのは、リニア新幹線を十四年に亘って工事しているJR東海だ。東京の八王子と大阪の高槻近郊で土地取得が暗礁に乗り上げてしまい、中間部分の莫大な投資が眠ったままになっていたのである。

「この法律を通していただきましたからには、密集地域を直線の大深度トンネルで、一挙に東京駅と新大阪駅へもつてまいります。本当にありがとうございます。東海道新幹線のほうにしても、品川駅から新横浜駅までの区間を直線に直して、六分のスピードアップをはかれます。国民経済の上で大

きな利益だと存じます」

「喜んでいただけて、わたしも嬉しいです。本来この法律は、成立が遅きに失したくらいでした。もつと早く法制化してしかるべきだった」

錦木は謙虚に言ったが、それが彼の本心でもあった。

「錦木先生にも国民党さんにも大変な借りができました。このご恩は機会あるごとにお返ししなければならんと思っております」

大崎社長は錦木の政治活動に対する支援を言外に約束して、

「先生もお忙しいでしょうから、これで」

また恭しく一礼してから、幹事長室を出て行った。

「厚生大臣が見えております」

間髪を入れず、泊秘書がドアから首を覗かせた。

「ああ、どうぞ」

こんどは同じ国民党の、彼が拔擢人事で入閣させた落合代議士が、太り過ぎの腹を揺すって入って来た。

「ああ、大臣、ご苦労さま」

錦木は気さくな調子で言った。彼の子飼いだ、一応敬意を表して『大臣』と呼んだ。そして、

「臓特法ですね」

相手が何も言わない先に尋ねた。錦木が臓特法というのは臓器移植特例法の略で、これも国民党幹事長の錦木が厚生省のエリート官僚を使ってまとめあげた法案であった。

「ええ、是非とも今国会で成立させたいと思っておりますので、上程に際して幹事長のご支援をお願い

いにやって来ました」

落合はガサツな印象だが、根回し上手なのが取柄だ。法案の実質的発案者である錦木の顔を立てて、バックアップ態勢を万全にしておこうというわけだ。

「この法律は人権問題や医療倫理、はては宗教まで絡んでいますから、反対意見は侮れません。必要の手はすべて打ったつもりでおりますが……」

臓特法はネガティブ・レジスタ法とも呼ばれていて、人が死亡したとき、生前反対の意思表示がなされていない限り、自己の臓器を第三者に無償で提供することに同意したと見做すという、これまた画期的な法律であった。

二十一世紀に入って日本は、世界から非難されながらも、第一位の臓器輸入大国になっている。しかし移植技術のめざましい進歩に対して、国内で提供される臓器の数が極端に払底していて、そのため医療施設は整っていても、臓器を貰^{もら}って生命を長らえたり健康を取り戻せる患者の数は限定されていた。臓器移植の倫理的側面がとやかく言われない土壌ができた今世紀に、当然出現するべき法案であった。これも医療問題に強い錦木が、先鞭^{せんべん}をつけてここまで来たものであった。

「わかりました。こういう法案は与野党で対立するべき問題ではない。何としても成立するよう、ぼくから野党サイドに十分働きかけておきましょう。悪くいっても継続審議にはなるよう、大臣にも頑張ってもらいますよ」

「はい、厚生省も一丸となってPR活動をしております」

「新聞やテレビのオピニオンリーダーに根回しを忘れないようにね。理解してくれてる人を選んで、この話題を集中的に取り上げさせるんです。これが通ることの国民的利益は、計り知れないからね」

倫理的なタブーに踏み込んで新しいことをやろうとすれば、常に反対が付きまとうものだが、錦木

はこの法律が国民に待望されていると思つてゐる。

「何しろいまや、脳以外はどうな臓器でも、提供者さえあれば移植できないものはないんだからね。人工臓器はまだまだだし……国民の大多数は臓器法を支持していますよ」

「幹事長にそうおっしゃつていただくと、もう成立したような気分になります。では、明日の閣議に諮^{はか}つて、事務局に今国会提出を命じます」

「是非そうしてください」

用向きはそれだけとみえ、落合厚相はちよつと寛^{くろ}いだ顔になつた。いちおうは渋い表情を作つて、

「ところで幹事長、桜井さんはちよつと無理なようですな。というより、かなり悪いようです……」
彼は、恵^え比^ひ寿^すにある新日本大学附属病院に入院している、同じ国民党の桜井宏代議員のことを言つてゐるのだ。

「そうですか、かなり進んでいるのかな」

錦木も眉^{まゆ}をひそめた。

「これは確かな筋の情報ですが、もう近親者が待機している状態とか……」

桜井代議員が肝臓癌^{がん}であることは、もう政界の公然の秘密になつてゐた。癌の治療が開始されるようになったのは前世紀の終りだが、それからの短期間に予防や診断法は飛躍的に進歩してゐた。分子レベルで細胞の異常を検出し、異常化過程の適切な時点で治療を施すことができるようになってゐるが、一部の種類の癌や発見が遅れたケースでは、まだ致命的な疾患であつた。

「補欠選挙になりますな」

落合厚相はかなり不謹慎なことまで口走つた。

「ああ……」

桜井代議士は、錦木正義が出ている港、千代田、新宿の三区からなる東京第一区の隣、品川区を中心とする第三区から出ているのだ。

「お互い身体には気をつけなければいけませんな。幹事長もご自愛なさってください」

落合は怖ろしそうに言って、一礼をしてから部屋を出て行った。

「新日本大学の小笠原教授ですが、お通ししてよろしいですか」

つぎに泊秘書が繋いだ来客は、錦木の高校時代からの友人であった。

「ああ、入ってもらってくれ。それと、コーヒーでもくれ」

こんどは気の置けない来客だ。すこし長居させることにした。

精悍な身体つきの泊秘書が、長い腕を伸ばしてドアをキープしている幹事長室の入口を、小柄で白髪、痩せ型の小笠原蔵が、身体つきのわりに重々しい足取りで入って来た。

「暫くだったな。おまえのほうから出かけて来るなんて、珍しいじゃないか」

錦木は前の二人のときとは全然違う、打ち解けた笑みを浮かべて、小笠原を窓際のソファへ誘った。

「今日は陳情だからな。この世の中は、頼むほうが出かけて行くことになっているそうだから」

小笠原は顔だけが大きくて、明らかにバランスを失している。お世辞にもいい男ではないが、大きな造作の深い眼窩の底から、よく光る眼が微笑っている。

「おじやましますよ」

ゆっくり腰をおろした。

彼は窓越しに拡がる国会議事堂と首相官邸のたたずまいに、暫く見とれていた。

「いい眺めだねえ。きみの仕事部屋には初めて来たけど」

「ああ、国会が建っている丘の麓までは、官衙街区といって、一般の会社なんかは建てられない場所なんだ。政党はまあ、官庁に準じるということで、強引に許可させたんだがね」

錦木は、同級生にはちよつと自慢そうな口ぶりになる。

「ぼくなんか、昼間は研究室に手術室、それに大学の教室を行ったり来たりの生活で、あまり太陽にも当たらない。医者の不養生だよ。政治家のほうが長生きするなあ」

「とんでもない。神経をすり減らすことばかりで、毎日死にそんな思いをしているよ。ところで、陳情を受けるか」

錦木は高校時代から一風変つたところのある旧友の、今日の来意が何となく気になった。

「ああ今から話す。きみに陳情に来ることになろうとは、昔は考えもしなかったなあ」

小笠原は彼の位置から見える窓の東の端を、ちよつと首を伸ばして眺めた。ホテルの陰になつて、この辺りには場違いな学校の森がある。錦木がブラジルから日本へやつて来て、ここから見える都立高校へ入学し、そこで顔を合わせたのが小笠原だったが、その頃は日本のことが何もわかつていない、それどころか日本語すら怪しい奇妙な少年であつた。

「それがいまや、日本を動かす、まあ辛く点数をつけても十指に入る政治家なんだからな。いや、大したもんだよ」

「手ぶらで陳情に来たんだから、せいぜい褒めろ。口は只だからな」

錦木はおかしそうに言いながら、新日本大学教授で脳神経科の高名な研究医でもある彼が、何の話を持って来たのか、ソファーに身体を沈めてつぎの言葉を待った。

「じつはな、正義。いまぼくは、ある研究をしていてね」

小笠原は昔の呼び名になつて、切りだした。